

早稲田の復興支援

— 東日本大震災から3年 —

Overview

広がる、つながる支援の輪

早稲田の復興支援の一部を紹介します。

盛岡

2013年11月1日

「研究院フォーラム2013 in 盛岡」

「海・内陸・山の連携を求めて—震災復興における持続性と広域協力の構築」をテーマに、復興に関する研究成果などを報告。中川武理工学術院教授が現地調査等に基づく学生の設計案などの実績を紹介。岩手県大槌町の碓川豊町長、岩手大学の三宅諭准教授、岩手日報の榎悟報道部次長ら被災地の関係者がパネリストとして参加し、震災復興をめぐる諸問題について活発な議論が交わされました。



石巻

グリークラブによる
鎮魂コンサート

2011年9月4日、8月末にようやく営業を再開した市内ホテルにて早稲田大学グリークラブによる鎮魂コンサートを開催。多数の校友、グリークラブOBである白井克彦前総長、400名を超える市民の方々が集まる中、男性合唱による校歌、紺碧の空、地元の民謡「斎太郎節」の力強い歌声が響きわたりました。



いわき市内のグラウンドにて、双葉高校・相馬農業高校の部員7名と野球交流（2014年1月）

福島県

早大野球教室など

2012年12月以降、野球部は相馬市、南相馬市、郡山市、いわき市の高校にて野球交流を継続的に行っています。そのほか、レスリング部、ソフトボール部、ラグビー蹴球部、グリークラブなども支援活動を行っています。



福島県

WAVOC*公認プロジェクト
「CAP (Community AIDS Project) による学習支援活動」

2011年8月・12月、2012年2月・8月、2013年8月と双葉高校の2、3年生を対象とした学習支援合宿を続けています。また、勉強の合間にはスポーツや花火大会などを通じて、より深い交流の絆を強めています。

宮古

市内各地での
音楽交流

※詳しくはP12-13へ



※WAVOC：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンターの略称

2011年3月11日に東日本を襲った大地震から早3年。

復興への歩みはいまだ遅々としています。

早稲田大学は地震発生直後から被災した地域の復興、

未来のためにできること、すべきことは何かを考えて、

学内外でさまざまな支援活動を行ってきました。

あらためてこれまでの活動を振り返るとともに、

アカデミックな視点や災害に対する大学の姿勢をお伝えします。



田野畑・岩泉

WAVOC公認プロジェクト 「思惟の森の会」による 育林活動

2011年4月に現地入り、22日より直ちに本格的な支援活動として、流された漁具や漁船の片づけ、写真の洗浄作業、支援物資の整理・仕分けなどを実施。毎年恒例の年3回開催される育林合宿に加え、震災以来、毎秋開催される田野畑復興祈念祭への協力、稲門祭での田野畑産品のワカメの販売なども行っています。

WAVOC公認プロジェクト

釜石・大槌

「RINC (Riral India&Nippon's Commitment) による 地域の復興・活性化に向けた活動」

2011年9月から、複数回にわたり釜石市箱崎町に通い、戸別訪問やイベント開催、「町の魅力マップ」の作成、ボランティア連携の場づくりなどを続けています。早稲田祭2013では、RINCの活動報告会やパネル展、箱崎町の婦人たちが作った手芸品の販売を行いました。



陸前高田

市内の側溝の 泥かきなど (2011年8月～)

※詳しくはP12-13へ



気仙沼

気仙沼チーム 仮設住宅での交流、学習支援、 観光再生支援など

がれき撤去活動に参加した学生により2012年4月に発足した気仙沼チームは、仮設住宅でのお茶会や健康体操などの交流、気仙沼高校での学習支援、観光再生支援など、幅広い分野で市民の方々のニーズを伺いながら活動しています。

※詳しくはP11へ



名取

「なとり鎮魂灯籠流し」などのイベント運営

2011年8月に「なとり鎮魂灯籠流し」、2012年3月に「3.11 ゆりあげの集い」、2013年3月に「名取3.11追悼イベント」が開催され、その事前準備と当日の運営補助として、多数の留学生を含む学生・教職員延べ177名がボランティアを行いました。同地域では、野球交流や開上中学校での学習支援活動なども実施しています。



大学の支援活動 ※活動の一部

2011年

- 3.11 東日本大震災発生、対策本部を設置
首都圏の帰宅困難者の一時待機施設として大隈講堂を開放
- 3.12 被災した2011年度入学希望者に対する各種手続き、在学上の経済的援助を決定
- 3.14 被災学生の学費免除ならびに奨学金制度の適用を決定
- 3.23 校友会と義援金・救済金についての取り組みを開始
- 4.4 WASEDA ONLINE (www.yomiuri.co.jp/adv/wol/) のオピニオンコーナーで「東日本大震災特集」として教員による分析、提言を発信開始
- 4.8 「東日本大震災復興支援室」(室長：鎌田総長) 設置
- 4.11 文学学術院・東日本大震災追悼イベント『鎮魂—そして半歩のあゆみ』
- 4.11-12 WAVOC・震災ボランティアの先遣隊計28名を宮城県石巻市に派遣 (以降、2014年1月末までに被災各地に 延べ302回4,404名を派遣)
※WAVOC全体の活動については次ページ以降およびWebサイト (www.waseda.jp/wavoc/) を参照
- 5.10 東日本大震災復興研究拠点を設置 (3プロジェクト7課題を選定) ※P14-15参照
- 5.11 理工学術院・被災地の教育研究機関へ実験機器などを提供
- 5.16 「東日本大震災被災学生支援奨学金」新設
- 6.14 演劇博物館グローバルCOEプログラム・フォーラム「大震災と芸術文化 現場からの証言」
- 7.2-3 鎌田総長が宮古・会津若松を訪問、復旧作業に参加
- 8.10 ビジネススクール・チャリティ講演会「学ぶことが、復興の力になる」
- 10.7 東日本大震災復興研究拠点公開シンポジウム「早稲田大学が取り組む復興研究」
- 10.8 アジア研究機構・第9回国際シンポジウム「3・11後の日本とアジア—震災から見えてきたもの」
- 11.28 『早稲田大学ブックレット「震災後」に考える』刊行開始 ※P16参照
- 12.3 チャリティイベント「第1回 早稲田駅 in 国立競技場」
- 12.11 東日本大震災復興研究拠点ほか主催シンポジウム・特別講演会「東日本複合大災害後の「日本人の心」そして「心のケア」を考える」
- 12.17 教育総合研究所・教育最前線講演会「震災と教育—学び、将来へ伝える」

2012年

- 2.10 GITIシンポジウム「未来のスマート社会と先端科学技術—3・11を乗り越えて」
- 3.8 東日本大震災復興研究シンポジウム「東日本大震災と福島原発災害から1年」
- 4.3 オープン教育センター「東日本大震災復興支援科目」開講
- 4.23 東日本大震災復興研究拠点・公開ワークショップ「1年間の調査・研究で見えてきた復興への新たな課題について」
- 5.25 『早稲田産学連携レビュー 2012』特集「早稲田大学の理工工が考える防災と復興—そのとき大学はなにができるのか?」(朝日新聞出版) 発行
- 6.5 環境総合研究センター「復興人材育成塾」開講
- 10.6 東日本大震災復興シンポジウム「東日本大震災復興と自然文化安全都市へ向けた課題」
- 12.21 被災5県の584高等学校に『早稲田大学ブックレット「震災後」に考える』既刊26冊を寄贈

2013年

- 3.8 人間科学学術院・第2回シンポジウム「東日本大震災と人間科学」
- 3.26 日英二国間セミナー「衝撃的被災と長期的減退への計画対応」
- 9.4 「減災研究の国際展開のための災害研究基盤の形成」が文科省に採択、津波・高潮・地震・噴火による複合災害研究の国際的研究拠点を形成
- 11.1 研究院フォーラム2013 in 盛岡
- 12.20 東日本大震災復興研究拠点公開シンポジウム「復興の先にある未来を見据えて進もう」

地域・人々とともにある支援とは

平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) のスタッフに
被災した地域における復興支援活動についてお話いただきました。

早稲田大学が行っている震災復興支援ボランティア派遣の中核的な役割を担うWAVOCでは、震災後いち早く先遣隊を派遣し、以来延べ302回、4,404名(2014年1月末)を現地に派遣してきました。その活動内容は、震災直後の泥かきや流出物の撤去にはじまり、復興イベント・観光支援、体育各部やサークル・各種グループなどによるスポーツ・文化交流、仮設住宅でのコミュニティづくり、子どもを対象とした学習支援、翻訳など多岐にわたります。2013年からは被災した地域の企業と連携したインターンシップなどもスタートしています。

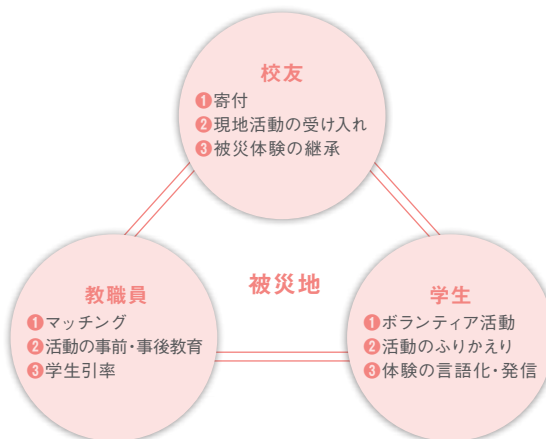
震災直後からボランティアに携わっている学生たちは、道路が寸断され疲弊した町の姿を目にし、家族を亡くした地域の人々の言葉を耳にし、それぞれの立場で「いま何が求められているか」を模索し続けています。復興というあまりにも大きな課題に対して、ときに自身の力のなさに打ちのめされる学生たち。しかし地域の人々との交流を通じ、微力ではあるが決して無力ではないことに気づき、小さな取り組みを積み重ねてきました。そのキーワードとなるのが「地域・人々とともに」

「早稲田型ボランティア」 校友、学生、教職員の三位一体で 社会貢献に努める

です。インフラ整備のような目に見える復興とは異なり、人々の心の復興には時間がかかります。若さに満ちあふれた早稲田の学生が各地域を訪れ、人々の傍らで、話に耳を傾けることが心の復興にお役に立てば幸いです。そうした学生たちの姿を通して、ワセダファンになったという声も数多くいただきました。また、地域の人の声を直に聞き、継続的に活動していくことで、地域の状況に合わせて支援の形を多様に変化させることが可能となっています。

私たちWAVOCは社会と大学のパイプ役として、体験的に学ぶ機会を広く提供することで学生が社会に貢献することを応援しています。特に復興支援に関しては、早稲田を卒業し、各地域で活躍されてきた校友をはじめ、各地域の人々から多くの協力をいただきました。そうした皆さんのお気持ちに報いるためにも、校友から大学、大学から学生・教職員へと^{たすき}襷をつなぐことでそれぞれの立場で社会貢献に努めることができる「早稲田型ボランティア」を通して、これからも継続的な復興支援に努めたいと考えています。

早稲田型ボランティア



- WAVOCのWebサイト
<http://www.waseda.jp/wavoc/>
- WAVOC
東日本大震災復興支援
ボランティア活動記録
「微力だが無力ではない」



早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) スタッフ。
前列右から本間知佐子事務長、
コーディネーターの橋谷田雅志さん(2014年1月より競技スポーツセンター所属)
後列右から専任職員の鈴木護さん、福元彩子さん



①



⑥

- ① 仮設住宅集会場における交流活動（2011年11月）
- ② 「気仙沼みなとまつり」オープニングセレモニー（2012年8月）
- ③ 早稲田カップを開催（2012年6月）
- ④ 2011年5月～6月の毎週末、気仙沼の内湾地区にて清掃活動
- ⑤ 避難所（当時）となった体育館ロビーでStreet Corner Symphonyによるアカペラコンサート（2011年8月）
- ⑥ 気仙沼の階上地区における植樹祭に参加（2012年10月）
- ⑦ がれきの中から大漁旗を発見。
右から5人目が高橋正樹さん（2011年6月）



⑦

Report 01 | 宮城・気仙沼

気仙沼の人々のために！ 学生の思いがつなぐ 気仙沼での支援活動

水産業と観光を基幹産業とし、フカヒレの生産地としても名高い宮城・気仙沼。地震、津波、火災などで大きな被害を受けたこの地域は、多くの校友からの支援を期待する声に応え、早稲田大学として最も早く復興支援活動を開始した地域のひとつです。学生ボランティアの宿泊施設にと会社の保養施設を提供してくださった校友で株式会社気仙沼商会の高橋正樹社長は、当時をこう振り返ります。

「正直、最初は『厄介な話が来たなあ』と思いました。しかしバス4台で来た学生たちは、作業着にヘルメット、軍手、マスクと完全防備。加えて、まったく笑わない真剣な顔、カオ、かお。現地OBとして、私が笑って見せるしかありませんでした。そんなに気を遣わなくていいと。それが私にとって久しぶりの笑顔となり、元気となりました。事前学習がなされ、私たちへの配慮が行き届いた学生たちの姿から、相当な覚悟で来てくれたことをひしひしと感じ、最初に厄介だと思った自分が恥ずかかったですね。最後に皆で歌った校歌、流した涙はいまでも私の活動の原動力です」。

もっと気仙沼や先輩方のお役に立ちたい!との学生の強い思いはWAVOCスタッフの背中を押し、WAVOC東日本大震災復興支援プロジェクトの一環として気仙沼での活動の継続が決定します。同時に、気仙沼のために汗を流す学生を見た高橋さんから教育委員会や観光課などを紹介いただいたことで活動

範囲は拡大。10月頃からは仮設住宅に暮らす人々への支援を中心に、学習支援やスポーツ支援など、地域の人々に寄り添った活動を中心に実施しました。2012年には地域の観光産業の再生と未来のビジョンを決めるための会議と連動したボランティアが始まり、毎週末に気仙沼へ通い、ホテルや民宿、レストランといった主要観光施設を通じて観光客へのアンケート用紙配布と回収を依頼。回収済アンケートの情報入力とデータ分析も行いました。2013年には学生が考案した気仙沼市のキャラクター・ホヤぼーやを使った体操が地域の皆さんから好評を博し、いまでは市内の保育園に導入されています。ボランティア活動の樞をつなぎ続けた学生たちの行動が、地域の人々との心のつながりを生み出しました。

そして現在も、気仙沼のためにさまざまな活動が続いています。そのひとつが「海の照葉樹林プロジェクト」。海との共存を考えた減災対策として照葉樹を使った防潮林ベルトを築くこのプロジェクトは、気仙沼地域の植生に基づく種子や幼苗の採取・育苗・植樹をするというもの。息の長い復興支援に、早稲田は大学と附属高校が連携し、早大生、OB・OG、本庄高等学院生などが参加し動き出しています。WAVOCの廣重剛史コーディネーターは、「被災地の防潮林再生のため、地元で採取したツバキなどの苗木を育て、数年後に植樹祭を行います。気仙沼や他の支援団体の方々など、幅広い世代・立場の人が関わっており、今後は大学近隣住民の方々をお誘いする予定です。多くの人が復興支援に携わる機会をつくり、震災の風化を防ぐこともできるでしょう。また、早稲田での地域福祉の向上にもつながると期待しています」と、震災復興から生まれた地方との交流を、未来へつなげる覚悟で語っています。

Report 02 | 岩手・宮古

スポーツ、ジャズ、応援… さまざまな形で宮古の人々に エールを送り続ける

古 来より津波被害の多い岩手・宮古は、大きな防浪堤を備えていたにも関わらず、田老地区をはじめ沿岸の集落が甚大な被害を受けました。多くの校友が地元の学校教員として活躍していたこともあり、早稲田は2011年5月から宮古北高校を宿泊拠点としてボランティア活動を開始します。宮古での支援活動は、地域の人々からの要請に応えた「気持ちを盛り上げる」ための活動が中心です。地域の人々にエールを送り続けた応援部、「七夕コンサート」や三陸鉄道のホーム、車内でジャズを演奏したニューオーリンズジャズクラブなど。さまざまな形で早大生のエールに触れた宮古市民の松原安子さんは当時を振り返ってこう話します。

「震災後、無音の町に初めて音楽が流れ、全身で聞いたジャズの音色をいまでも鮮明に思い出します。駅前商店街、三陸鉄道での演奏に、癒され、勇気づけられました。2011年にはクリスマスコンサート後に市役所前の歩道橋の上から、多くの人々の眠る宮古の海に向けて演奏してくださり、夜空に響く音色に、魂が救われるのを感じました」。

また、レスリング・柔道・野球などスポーツ交流も積極的に行われました。柔道部の指導を受けた佐々木碧衣さん（当時宮古高校2年）は「遠い存在だった早稲田大学がわざわざ宮古高校に来てくれたことに感激しました。とても親切的な指導にワセダファンになりました」と早稲田大学へ進学。いまでは社会科学部で学びながら、柔道部の一員として地元・宮古へのスポーツ交流に参加しています。支援を受ける側とする側の両方の立場から、「もっと現地の人たちと交流できる支援を期待しています。被災した人たちの話を聞いたり、場所に行ったり。もっと知った上で、何が本当の支援になるかを考えることが大切だと考えています」と話しています。



Report 03 | 岩手・陸前高田

「微力だが無力ではない」 “学びの部屋” 学習支援& はまらっせん農園プロジェクト

- ① 稲門祭にて、はまらっせん農園で獲れた野菜を販売。
右から菅野和子さん、山本太郎さん（2013年10月）
- ② はまらっせん農園で地域の皆さんと一緒に農作業（2013年9月）
- ③ 卓球部による技術指導と交流（2011年7月）
- ④ 学びの部屋で子どもたちに勉強を教えるボランティア学生（2013年2月）
- ⑤ 早稲田カップを開催。8チーム約320名が参加（2012年9月）
- ⑥ 高田町の田畑でがれきの撤去や草刈りをする学生（2011年8月）
- ⑦ 野球交流の一環で、被災した高田高校の建物内を歩きながら震災当日の説明を受ける野球部員たち（2012年1月）
- ⑧ 高田高校の文化祭「高祭」で歌う早稲田大学混声合唱団（2012年8月）





- ① ニューオルリンズジャズクラブによる音楽指導 (2011年7月)
- ② 清掃活動に参加する鎌田総長 (2011年7月)
- ③ クリスマス点灯コンサート翌日に宮古の山本正徳市長 (中央) を囲んで。市長の左が松原安子さん (2012年11月)
- ④ 応援部員と中学生の合同パフォーマンス (2011年10月)
- ⑤ 野球部員による技術指導 (2012年1月)
- ⑥ 柔道部による合同稽古。前から2列目、左から4人目が佐々木碧衣さん (2011年7月)



復興の希望「奇跡の一本松」がある岩手・陸前高田は、大津波により市街地が甚大な被害を受け、震災直後はボランティア派遣のニーズを探るところではない状況でした。2011年6月、高田高校卓球部のインターハイ出場の知らせを受け、早稲田大学卓球部の派遣が決定します。大学選手権を目前に控える中、監督の「これは最優先事項です。遠慮しないで」との声に後押しされ、代表選手たちによる技術指導と交流活動が始まりました。津波で両親を失った高校生の前向きな生き方に触れた学生の一人は「自分は勝つことがすべての自己中心的な人間だった。将来は世の中の役に立つような仕事をしたい」と価値観が転換。社会人になったいまも個人的に高田高校を訪問して卓球交流をしています。

時間とともに変化する支援ニーズに応え、がれきの撤去や側溝の泥かきといったハード面の支援から、小・中・高生の部活動や応援団の指導「学びの部屋」での学習指導、あるいはスポーツ交流、病院でのコンサート開催など人々に寄り添ったソフト面の支援が増えていきます。同年8月に柔道部員が現地の高校に畳を届け、2012年1月には野球部による技術指導、9月はア式蹴球部と日本サッカー協会特任コーチ (当時) で校友の加藤久さんの協力による「早稲田カップ」を開催。地元の指導者の方々も、久しぶりに瞳を輝かせる子どもたちの姿に感動し「これから毎年、この場所で早稲田カップを開催してほしい」と口々に語られました。

また2012年12月には、校友で陸前高田市教育長の山田市雄さんを通じて、長期休暇中に開催される東京大学と合同の学習支援活動「スリーデイズ・プログラム」(現地での平日3日間の活動) が実現します。さらには、夜行バスで東京を出発し、翌朝の現地到着後に中・高生への学習指導を行い、再び夜行バスで東京に戻るという「0泊3日プログラム」を、月2回のペースで継続しています。学生たちの姿に、山田教育長は「震災直後から0泊3日の強行日程で被災地に飛び込んだ早稲田スピリットにあ

ふれた学生たち。そうした学生を育てている母校・早稲田大学にかつてないほどの誇りと頼もしさ、そして感動を覚えました。子どもたちにとって早稲田大学が身近であこがれる大学になってきていることはOBとして大変うれしいことです。学生を通じて、早稲田大学が持っている力を、特に被災地の児童生徒に対する支援活動を継続的に展開していただきたいですね。本市における、中高生への学習指導、運動部や文化部への部活動指導などはぜひ継続をお願いします」と話しています。

現在は学習支援に加え「はまらっせん農園プロジェクト」も加わり、月1～2回の活動を行っています。「はまらっせん」とはこの地域の方言で「どうぞ、誰でもお入りなさい」という意味。校友の石木幹人さんが2013年3月まで院長を務められた岩手県立高田病院が推進するプログラムで、仮設住宅入居者の生活不活発病予防のために農作業を促し、心身の健康維持を図るものです。仮設住宅に住む菅野和子さんは「早稲田大学の学生が来てくれたことに感激しました。賢そうな子たちで、卒業生や大学のバックアップもしっかりしているように見え、息の長い活動をしてくれると期待できました。昨年10月、大学キャンパスでの稲門祭で学生たちと一緒に農園で獲れた野菜を販売したことは一番の思い出です。今年もぜひ一緒にやりたいですね」と、早稲田の学生との交流について話しています。

プロジェクトのリーダーで、孫のように歓迎してくれる人々の心に触れた創造理工学部4年の山本太郎さんは「現地の人たちと交流し、直接話を聞かなければ分からないことがあると考えています。学生にできることは微力かもしれませんが、決して無力ではないことに気づくことができました。確実に継続することなら自分にだってできます。今は一人の人間としてこの地域に寄り添ってたいです。そして、将来は技術者として陸前高田の復興に携わり、リーダーシップを発揮したいと思います」と決意を語っています。

A Study on the Reconstruction

復興・未来へのアカデミズム

早稲田大学では、2011年5月11日、東日本大震災の復興を目的として叡智を結集する中長期の研究プロジェクトとして、3プロジェクト7課題からなる「早稲田大学 東日本大震災復興研究拠点」（拠点責任者：深澤良彰・研究推進部門総括理事）を設立しました。東日本大震災の復興に資するとともに、他地域での同様な災害による被害の最小化にも貢献できる重要な研究課題として注目されています。同拠点の活動に、WASEDAサポーターズ倶楽部の支援も受けて、大学は年間最大2千万円を3年間助成してきました。ここでこの3年を振り返り、研究成果と今後の課題について考えます。

<http://www.waseda.jp/rps/fas/research-expenses/fukkou.html>

1. 医療・健康系復興研究プロジェクト

研究代表者：中尾洋一 理工学術院教授

研究課題：大震災がもたらす健康被害の予防へ向けた科学的・社会的対応のためのニーズ調査研究

2. インフラ・防災系復興研究プロジェクト

研究代表者：柴山知也 理工学術院教授

研究課題：東北地方太平洋沖地震津波の被災分析と復興方略研究

連携研究者：香村一夫 理工学術院教授

研究課題：東日本大震災復旧・復興に向けた環境診断および対策技術の提言

連携研究者：松岡俊二 国際学術院教授

研究課題：複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興に関する研究—原子力災害とリスクガバナンス

3. 都市計画・社会システム系復興研究プロジェクト

研究代表者：中川 武 理工学術院教授

研究課題：文化遺産から学ぶ自然思想と調和した未来型復興住宅・都市計画に関する総合研究

連携研究者：浦川道太郎 法学学術院教授

研究課題：早稲田大学東日本大震災復興支援法務プロジェクト

連携研究者：早田 幸 社会科学総合学術院教授

研究課題：大規模災害への復元力のある新たなグローバル社会システムの再構築

各プロジェクトの研究代表者に、研究内容と成果報告を伺いました。



中尾 洋一
理工学術院教授

医療・健康系復興研究プロジェクト

復興の先にある未来を見据え環境汚染

当研究プロジェクトは浅野茂隆先生が中心となって立ち上げたもので、①災害時の適正なリスク・コミュニケーションの確立とコミュニティの形成、②災害時医療体制の確保と国際的連携の促進、③災害時に有用なデバイス機器の開発、④災害時に拡散しうる各種有害化学物質が健康に及ぼす影響に関する作用機構の解明・治療法の開発、の4グループによる分野横断的な研究を展開してきました。

私は津波被害のあった沿岸地域の土壌サンプルの収集・分析を行い、一部について環境汚染物質の拡散状況と生物学的への影響を調査研究しています。特にこの分野は化学物質が及ぼす長期的影響の適切な評価法の確立が



柴山 知也
理工学術院教授

インフラ・防災系復興研究プロジェクト

東北地方太平洋沖地震津波の被災分析

想定する津波の規模を見直すとともに、想定値に縛られずに、それを超える津波が来襲した場合にも対応可能な避難計画を作成するなど、防災計画の練り直しを提案しています。また津波防潮堤の越流現象の解明や洗掘防止策の検討を行い、津波来襲時に粘り強く抵抗し、頼りになる構造物や防潮林との組み合わせを考案しました。一方で、東北の津波では、防災構造物のみで居住地を守ることは困難であることがはっきりしたため、避難計画の修正というソフト面での対策についても数値シミュレーションモデルを開発して、具体的な避難路の選定方法の提案をしています。



中川 武
理工学術院教授

都市計画・社会システム系復興研究プロジェクト

個人・コミュニティが自然と調和する生き

当研究プロジェクトは、被災地のコミュニティの復興、再生のために必要な都市・集落計画の方法と地域経済や法務的課題の調和的解決を、都市・建築、社会学、法学系チームの協力により探究するものです。

私のチームのこれまでの成果は、『早稲田大学ブックレット「震災後」に考える』シリーズの『文化遺産の保全と復興の哲学』（2012年4月）と『復興まちづくりに文化の風を』（2013年10月）にまとめました。特に岩手県大槌町において、復興のために、伝統芸能・文化財建造物・自然が果たしている役割に注目し、本学と中国の大学の建築学科の学生が現地に入り、地元の自治体や住民との



物質の長期的影響の評価を行いたい

遅れているため、客観的な規制基準を設けるためにも地道な調査・実験が必要です。環境中に広がった化学物質と健康の因果関係を明確にすることは予防および治療法の確立を可能にすると同時に、健康に影響する化学物質に特化したセンシング機器の開発など他分野の進展にもつながると考えています。

今後はプロジェクトの成果をイノベーションとして発信し、日本だけでなくアジア地域の医療分野における社会貢献につなげていく必要があるでしょう。復興の先にある未来を見据えて、これからも分野横断型の研究を地道に継続していきたいと思っています。

と復興方略研究

複合災害への対応を考えると、研究者間の連携を促進し、融合分野を形成していくための仕組みが必要です。これまでに築いてきたカナダ、イギリス、イラン、インドネシア、ベトナム、タイ、スリランカ、タンザニア、ブータンなどの災害研究者との国際ネットワークを緊密にすることによって、①構造物の減災、②複合災害の減災の2テーマについて早大理工を災害研究の国際的な拠点にすることを目指していきます。また、これまでに開発した津波・高潮の予測プログラム、構造物周辺の流動予測プログラム、現地観測、水理実験の方法など、研究成果をパッケージとして世界の災害に応用し、その汎用性を高めたいと考えています。

方を考えること

協力のもとにヒアリングや比較調査を重ね、解決に向けたアイデアを話し合うためのワークショップを2012年5月と2013年5月に行ったことは大きな成果です。また、2013年11月には研究院の成果発表を盛岡で行うことができたことも特筆したいと思います。

私が、現時点で考えていることを誤解を恐れずにいえば、震災復興は、防潮堤の高さを10mから15mにし、地域経済の基盤の再建によって始まるのではなく、自然の恵みを受け、たたかい、それと調和する生き方を個人とコミュニティ・共同体の基礎に、そして文化的創造性や安全性の核心に据えることによって可能となるに違いない、ということです。

連携研究者に研究課題について伺いました。

東日本大震災復旧・復興に向けた 環境診断および対策技術の提言



香村 一夫
理工学術院教授

大きな地震により生まれるさまざまな環境破壊や環境問題に対して「研究面から如何に貢献できるか」を探ってきました。現在は、津波塩害耕作地の復活に向けて、東北地方に分布する火山灰土壌を用いた低コスト・低労力・環境低負荷の浄化法を開発しています。この技術は、塩害で困っている世界の乾燥地域にも応用可能です。世界へ羽ばたける技術としてさらなる改良を試みています。

複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興に関する研究 —原子力災害とリスク・ガバナンス



松岡 俊二
国際学術院教授

私たちの学際共同研究は、原子力安全規制と福島復興をメインテーマとし、大震災と福島原発事故で被災した人々に向き合い、そこから学ぶことで、原子力政策や復興政策と大学の教育研究のあり方について考えてきました。今後も、本学と福島復興を調査研究で結び、多様性を生かした社会イノベーションの創発による持続可能な社会のあり方について研究を続ける予定です。

早稲田大学東日本大震災復興支援法務プロジェクト



浦川 道太郎
法学学術院教授

本プロジェクトは、法学学術院の教員有志を中心に立ち上げたものです。福島県浪江町当局との密接な協力のもと、町民の被災実態調査や慰謝料増額の集団申し立てなどを支援しています。法科大学院生も大きく貢献しており、臨床法学の一端を担っています。今後は他の被災町村とも協力して、災害復旧の進展に伴い生じる新たな法的課題に対応した長期的な被災者への支援を継続する予定です。

大規模災害への復元力のある 新たなグローバル社会システムの再構築



早田 幸
社会科学総合
学術院教授

グローバル社会において大災害からの復元力を確保するためには地方自治体や政府の力だけでは限界があり、海外からの財政的・人的・知的支援が重要となります。農林漁業地域においても、東日本大震災後は海外との交流事業や復興の検証セミナー、医療支援や農水産業機材の提供、水産業視察など多様な支援がされています。これらの参与観察を継続し、支援要素が復興成果となるまでの過程を検証することで、復興政策のグローバルモデル確立を目指します。

A Study on the Reconstruction

各研究分野で活躍する本学教員に「復興」をテーマに寄稿していただきました。

復興とジェンダー



村田 晶子
文学学術院教授

「生きていくことを支え合う」復興に向けたコミュニティづくりを

私は、この2年間、福島県男女共生センターからの委託研究事業「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり―男女共同参画社会実現の視点から」の研究代表者として、男女共同参画やジェンダー、専門である成人教育、対人支援職の支援の観点から復興支援に関わっています。痛感したことは、福島への差別的眼差しと、日常に戻ろうとするとときに「福島で起きていること」を忘れる傾きがあるこ

と。これをいかに考えるべきか、重い課題です。一方で、自治体職員や保健師、女性センターなど各種施設職員、女性団体などの支援職や地域コミュニティのコーディネーターが、福島の現実に向き合いながら日々の営みを語るときに紡ぎ出される「生きていくことを支え合う思想」と出会いました。その一言一言に大学や研究者は何をしなければならないのか、揺さぶられています。

復興とこころのケア



本田 恵子
教育・総合科学学術院教授

震災後の心のケア ～被災した子どもの心とともに～

直接支援から、傷を抱えながらも健康に生きていくための継続支援へと変化する中、仮設住宅を訪問するボランティアスタッフへの支援と学校現場で子どもたちに生じるさまざまな課題の予防、対応する先生方への支援を行っています。復興に向けて進む人々のエネルギーと発想力は素晴らしい一方で、取り残された人との格差は広がり、仮設住宅内での人間関係のトラブル、子どもたちの非行、犯罪などが

増えています。

研究室の大学院生と共に、1～3か月に一度、ボランティアスタッフの聴く力の研修を行い、事例検討や具体的な支援方法を伝えています。また、学校を訪問して教職員の研修を行い、ストレスへの対応が難しい子どもたちの話の聴き方、キレる場面での対応方法について具体的な声かけや対応を継続的に学んでいます。

復興とマーケティング



武井 寿
商学学術院教授

存在に寄り添う消費

宮城県が復旧期と計画した3年間が経過し、この間に数名の東北出身者が当ゼミを巣立ち、卒業生も含め多数の者がさまざまな職種で東北に関わっています。昨夏、複数の課題本を提起しレポートを求めたところ、仙台出身の2名は震災関連の書籍を選択しました。郷里への深い思いと連帯の意識は私たちの想像を越えるものと感じます。

研究は対象化を基本としています。震災で亡く

なった親族の帯を形見としてクリーニングする、カラオケで互いの無事を確認し元気を回復するなど、自分の今と、過去や将来を結びつけて存在を認識することが消費を通じて行われています。地元の人々の失われた日常性を取り戻すには血の通った支援が必要と言えましょう。東北への支援は祈りの気持ちでと考えます。

復興をさまざまな角度から考える オープン科目

本学学生が、復興について政治、経済、法律、科学、健康など多角的な視点から考えることができるよう、全学生が受講可能なオープン教育センター設置科目として「早稲田大学発・これからの日本を考える」(2012年度)や「震災復興のまちづくり JA共済寄附講座」(2012・2013年度)などを開講しました。



『早稲田大学ブックレット 『震災後』に考える』を刊行

「東日本大震災復興支援室」では、『早稲田大学ブックレット『震災後』に考える』の既刊33冊を、被災5県(青森・岩手・宮城・福島・茨城)の全高等学校約580校(高等専門学校・特別支援学校含む)に寄贈。同シリーズは、東日本大震災の被災地域復興支援のために、主として本学学生・教職員によって行われてきたさまざまな研究・支援プロジェクトを通じて得た知見・思索・活動を広く社会に提供し、その一助に資するために刊行されています。

問い合わせ先：早稲田大学出版部

TEL：03-3203-1551 <http://www.waseda-up.co.jp/>





副総長・常任理事

清水 敏 社会科学総合学院教授

しみず・さとし

1980年早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程中退、徳島大学教育学部専任講師、信州大学教育学部助教授を経て1993年早稲田大学社会科学総合学院教授。2006年より副総長・常任理事。2010年より早稲田佐賀学園理事・評議員。他に文部科学省大学設置・学校法人審議会委員など。主な著書（共著）に「入門労働法」「自治体における臨職・委託労働者の法的地位」。

Interview

早稲田の復興支援の知見を世界へ

復興支援に関する早稲田大学の姿勢について、
清水敏 副総長に話を伺いました。

教育機関としてふさわしい
復興支援とは

早稲田大学では、東日本大震災に間を置かず設置した鎌田総長を室長とする「東日本大震災復興支援室」を中心に継続的な復興支援を行っています。教育機関である大学としてふさわしい復興支援とは何かを検討し、「(1)被災学生の就学支援、(2)被災地域への支援、(3)研究を通じた復興支援」の3つの支援方針を打ち立て、全学的な取り組みを進めてきました。被災した学生への就学支援として「学費の減免」「特別奨学金」措置を設け、いかなる状況になっても在校生の就学を継続できるような環境を整えています。被災した地域での支援活動は、平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が中心となり、現地の受け入れ環境の整備、学生の安全の確保、事前教育の徹底など、これまでのボランティア活動で得たノウハウを生かして大規模に展開し継続してきました。また、大規模な複合災害からの復興には、さまざまな学問分野の連携が不可欠です。総合大学である本学では各専門分野のさまざまな知見を結集する「東日本大震災復興研究拠点」を設け、復興に関する全学

横断的な連携プロジェクトを進めてきました。

東日本大震災から3年が経とうとしている現在、復興が進む中で支援の形は多様化しています。その変化の過程において、継続的に復興に取り組むためにはパワーが必要です。早稲田大学が復興支援を継続できる背景には、世のため人のために行動する利他の精神に満ちあふれた人材が多く集まっていること、そして自身が被災しながらもボランティア学生の受け入れに尽力してくださった現地の校友、全国の校友からのWASEDAサポーターズ倶楽部を通じた支援があります。また、職員によるサポートがさまざまな復興支援活動の土台となっており、さらに職員の理解を深めるために2012年度以降の新入職員研修では、気仙沼および陸前高田でのボランティアも実施しています。

東日本大震災の復興支援が
グローバル課題の解決に寄与

一方で被災した地域・人々とともに行う復興支援は、大学の英知と人間力を社会に還元するという面だけでなく、参加した学生・教職員にとって多くの経験と気

づきを与えてくれる場ともなりました。現地で活動した学生や教職員は「目の前の課題を解決するためにこれまで学んだことをどう生かせばいいか」「これまでの科学技術の在り方や学問・研究に対して、研究者としての社会的責任とは何か」を深く考え、模索しています。

東日本大震災の復興に関わる支援活動および研究は、資源、貧困、エネルギー、紛争、高齢化社会などグローバル規模で解決しなければならないさまざまな問題に応用することができます。復興支援で経験や知識を得た学生たちが学び、社会で研鑽を積み、国内外のさまざまな課題に対してリーダーシップを発揮して活躍することが、人類社会への貢献につながっていくことになるでしょう。まずは、東日本大震災の復興支援に関わった学生のその後の学習状況や進路選択、キャリア形成への影響などを継続的にフォロー、分析し、今後のさまざまな教育・ボランティア活動に生かしていきたいと思っています。それが大学として東日本大震災の復興に携わる意義であり、関わった方々への感謝を示すことになると考えています。これからも本学はオールワセダで復興とそれに連なる研究・教育に取り組んで参ります。